

Tychonoff の定理と選択公理

alg-d

<http://alg-d.com/math/ac/>

2014 年 8 月 15 日

定義. (X, \mathcal{O}_X) を位相空間とする.

1. X がコンパクト

\iff 部分集合 $\mathcal{U} \subset \mathcal{O}_X$ が $X = \bigcup \mathcal{U}$ を満たすならば, ある非負整数 n とある $U_0, \dots, U_n \in \mathcal{U}$ が存在して $X = U_0 \cup \dots \cup U_n$.

※ 集合 \mathcal{A} に対して $\bigcup \mathcal{A} := \bigcup_{A \in \mathcal{A}} A$, $\bigcap \mathcal{A} := \bigcap_{A \in \mathcal{A}} A$ である.
--

2. $\mathcal{F} \subset \mathcal{A}_X$ が有限交差性 (finite intersection property) を持つ

\iff 任意の整数 $n \geq 0$ と任意の $F_0, \dots, F_n \in \mathcal{F}$ に対して $F_0 \cap \dots \cap F_n \neq \emptyset$.

補題 1. 位相空間 X に対して次の命題は同値.

1. X がコンパクト

2. $\mathcal{F} \subset \mathcal{A}_X$ が有限交差性を持つ $\implies \bigcap \mathcal{F} \neq \emptyset$

証明. 補集合を考えれば明らか. □

定義. X を位相空間とする.

1. (I, \leq) を有向集合とするとき, $\{x_i\}_{i \in I}$ ($x_i \in X$) を X の有向点列という.

2. $x \in X$ が X の有向点列 $\{x_i\}_{i \in I}$ の集積点 (cluster point)

$\iff x$ の任意の開近傍 $U \subset X$ と任意の $i \in I$ に対して, ある $j \geq i$ が存在して $x_j \in U$ となる.

3. X の有向点列 $\{x_i\}_{i \in I}$ が $x \in X$ に収束する

$\iff x$ の任意の開近傍 $U \subset X$ に対してある $i \in I$ が存在して, 任意の $j \geq i$ に対

して $x_j \in U$ となる.

定義. $(I, \leq), (J, \leq)$ を有向集合とし, $\{x_i\}_{i \in I}$ を X の有向点列とする. 順序を保つ写像 $i: J \rightarrow I$ が「任意の $i_0 \in I$ に対してある $j \in J$ が存在して $i_0 \leq i(j)$ 」を満たすとき, 有向点列 $\{x_{i(j)}\}_{j \in J}$ を $\{x_i\}_{i \in I}$ の部分有向点列という.

次の有向点列に関する性質は認めることにする.

命題. X を位相空間とする.

1. $x \in X$ が X の有向点列 $\{x_i\}_{i \in I}$ の集積点である
 $\iff x$ に収束する $\{x_i\}_{i \in I}$ の部分有向点列が存在する.
2. X がコンパクト
 $\iff X$ の任意の有向点列が集積点を持つ.
 $\iff X$ の任意の有向点列が収束する部分有向点列を持つ.

定理. 以下の命題は (ZF 上) 同値.

1. 選択公理
2. コンパクト空間の直積はコンパクト. (Tychonoff の定理)
3. コンパクトな T_1 空間の直積はコンパクト.
4. 開集合が有限個な空間の直積はコンパクト.
5. 開集合が丁度 3 個な空間の直積はコンパクト.

証明. (1 \implies 2) $\{X_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$ をコンパクト空間の族とする. $X := \prod_{\lambda \in \Lambda} X_\lambda$ がコンパクトであることを示すために, X の有向点列 $\xi = \{f_i \mid i \in I\}$ を取る. $\Sigma \subset \Lambda$ に対して $\xi|_\Sigma := \{f_i|_\Sigma \mid i \in I\}$ と書く. (各 $f_i \in X$ は写像 $\Lambda \rightarrow \bigcup_{\lambda \in \Lambda} X_\lambda$ であることに注意しておく.)

$$A := \left\{ g \mid \Sigma \subset \Lambda, g \in \prod_{\lambda \in \Sigma} X_\lambda, g \text{ は } \xi|_\Sigma \text{ の集積点} \right\}$$

と定義し, A に包含関係 \subset で順序を入れる. A に Zorn の補題を適用する為に, 部分全順序 $C \subset A$ を取る. $h := \bigcup_{g \in C} g$, $\Sigma := \bigcup_{g \in C} \text{dom}(g)$ と置く. $h \in \prod_{\lambda \in \Sigma} X_\lambda$ は $\xi|_\Sigma$ の集積点である.

∴) 任意の開近傍 $U \ni h$ と $i \in I$ を取る. $U = \prod_{\lambda \in \Lambda} U_\lambda$, 有限個の λ を除いて $U_\lambda = X_\lambda$, としよ. $U_\lambda \subsetneq X_\lambda$ となる λ 全体を $\lambda_1, \dots, \lambda_n$ とする. このときあ

る $g \in C$ が存在して $\lambda_1, \dots, \lambda_n \in \text{dom}(g)$ となる. $g \in \prod_{\lambda \in \text{dom}(g)} U_\lambda$ であり, g が $\xi|_{\text{dom}(g)}$ の集積点だから, ある $j \geq i$ が存在して $f_j|_{\text{dom}(g)} \in \prod_{\lambda \in \text{dom}(g)} U_\lambda$ となる. このとき定義から明らかに $f_j|_\Sigma \in U$ である. よって h が $\xi|_\Sigma$ の集積点であることが分かった.

故に $h \in A$ となるから, h が C の上界である. 従って Zorn の補題により A の極大元 g が存在する.

$\Sigma := \text{dom}(g) \subsetneq \Lambda$ と仮定する. $\mu \in \Lambda \setminus \Sigma$ を取る. g は $\xi|_\Sigma$ の集積点だから, g に収束する部分有向点列 $\eta = \{f_{\varphi(j)} \mid j \in J\}$ が存在する. このとき $\eta(\mu) := \{f_{\varphi(j)}(\mu) \mid j \in J\}$ は X_μ の有向点列である. 今 X_μ はコンパクトだったから, $\eta(\mu)$ の集積点 $a \in X_\mu$ が存在する. このとき $\tilde{\Sigma} := \Sigma \cup \{\mu\}$ として $\tilde{g} \in \prod_{\lambda \in \tilde{\Sigma}} X_\lambda$ を

$$\tilde{g}(\lambda) := \begin{cases} g(\lambda) & (\lambda \in \Sigma) \\ a & (\lambda = \mu) \end{cases}$$

と定めれば $\tilde{g} \in A$ である.

∴ \tilde{g} が $\xi|_{\tilde{\Sigma}}$ の集積点であることを示せばよい. その為に任意の開近傍 $U \ni \tilde{g}$ と $i \in I$ を取る. $U = \prod_{\lambda \in \Lambda} U_\lambda$, 有限個の λ を除いて $U_\lambda = X_\lambda$, としてよい. $U_\mu = X_\mu$ の時は簡単に分かる. $U_\mu \subsetneq X_\mu$ とする. η が g に収束するから, ある $j_0 \geq i$ が存在して $j \geq j_0$ に対して $f_j|_\Sigma \in \prod_{\lambda \in \Sigma} U_\lambda$ である. 一方 $a = \tilde{g}(\mu)$ が $\eta(\mu)$ の集積点だったから, ある $j \geq j_0$ が存在して $f_j(\mu) \in U_\mu$ となる. よって $f_j|_{\tilde{\Sigma}} \in U$ である.

よって $\tilde{g} \supsetneq g$ だから g の極大性に矛盾する. 故に $\text{dom}(g) = \Lambda$ であり, g は ξ の集積点である.

(2 \implies 3) 明らか

(3 \implies 1) $\{X_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$ を非空集合の族とする. どの X_λ にも含まれない元 $\infty \notin \bigcup_{\lambda \in \Lambda} X_\lambda$ を用意し, $Y_\lambda := X_\lambda \cup \{\infty\}$ とする. 各 Y_λ の位相を

$$\mathcal{O}_{Y_\lambda} := \{U \subset Y_\lambda \mid Y_\lambda \setminus U \text{ は有限集合}\} \cup \{\emptyset, \{\infty\}\}$$

で定義する. 各 $(Y_\lambda, \mathcal{O}_{Y_\lambda})$ はコンパクトである.

∴ $\{U_i\}_{i \in I}$ を Y_λ の開被覆とする. \mathcal{O}_{Y_λ} の定義から, $Y_\lambda \setminus U_{i_0}$ が有限集合となるような $i_0 \in I$ が存在する. $Y_\lambda \setminus U_{i_0} = \{y_1, \dots, y_n\}$ と書く. $\{U_i\}_{i \in I}$ が開被覆である

ことから $y_k \in U_{i_k}$ となる i_k が存在する. この時 $Y_\lambda = U_{i_0} \cup U_{i_1} \cup \dots \cup U_{i_n}$. 従って Y_λ はコンパクト.

また明らかに Y_λ は T_1 空間でもある. 故に仮定 3 から直積空間 $Y := \prod_{\lambda \in \Lambda} Y_\lambda$ もコンパクトである. \mathcal{O}_{Y_λ} の定義から, $X_\lambda = Y_\lambda \setminus \{\infty\} \subset Y_\lambda$ は閉集合. 閉集合の族 $\{\pi_\lambda^{-1}(X_\lambda)\}_{\lambda \in \Lambda}$ は有限交差性をもつ.

\therefore 任意の $\lambda_1, \dots, \lambda_n \in \Lambda$ に対し $\pi_{\lambda_1}^{-1}(X_{\lambda_1}) \cap \dots \cap \pi_{\lambda_n}^{-1}(X_{\lambda_n}) \neq \emptyset$ となることを示せばよい. 各 X_λ は空でないから, $x_{\lambda_1} \in X_{\lambda_1}, \dots, x_{\lambda_n} \in X_{\lambda_n}$ が取れる. λ_i 以外の $\lambda \in \Lambda$ に対しては $x_\lambda := \infty$ として $x := (x_\lambda) \in Y$ を考える. 明らかに $\pi_{\lambda_i}(x) \in X_{\lambda_i}$ だから $x \in \pi_{\lambda_1}^{-1}(X_{\lambda_1}) \cap \dots \cap \pi_{\lambda_n}^{-1}(X_{\lambda_n})$.

よって補題 1 の条件 2 から $\emptyset \neq \bigcap_{\lambda \in \Lambda} \pi_\lambda^{-1}(X_\lambda) = \prod_{\lambda \in \Lambda} X_\lambda$ である.

(2 \implies 4) 開集合が有限個の空間はコンパクトなので明らか.

(4 \implies 5) 明らか.

(5 \implies 1) 3 \implies 1 の証明において, Y_λ の位相を

$$\mathcal{O}_{Y_\lambda} := \{\emptyset, \{\infty\}, Y_\lambda\}$$

で定めればよい. □

定理. 任意の整数 $n \geq 3$ に対して

選択公理 \iff 開集合が丁度 n 個な空間の直積はコンパクト.

証明. $Y_\lambda := X_\lambda \sqcup \mathbb{N}$ として

$$\mathcal{O}_{Y_\lambda} := \{\emptyset, \mathbb{N}, Y_\lambda, \{4\}, \{4, 5\}, \dots, \{4, 5, \dots, n\}\}$$

と定めればよい. □

定理. 任意の整数 $n \geq 3$ に対して, 以下の命題は (ZF 上) 同値.

1. 選択公理
2. 互いに同相なコンパクト空間の直積はコンパクト.
3. 互いに同相な, 開集合が丁度 n 個ある空間の直積はコンパクト.

証明. 1 \implies 2 と 2 \implies 3 は明らか.

(3 \implies 1) 選択公理は

非空集合の族 $\{X_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$ で全ての X_λ の濃度が等しいもの、に対して $\prod_{\lambda \in \Lambda} X_\lambda \neq \emptyset$.

と同値だった (集合に関する命題を参照) ことから明らか.

しかし, 直接選択公理を示すことも出来るので, その証明を書いておく. 簡単のため $n = 3$ とする. $\{X_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$ を互いに素な非空集合の族とする.

$X := \bigcup_{\lambda \in \Lambda} X_\lambda$, $Y := X \times \mathbb{N}^X$ として Y の位相 \mathcal{O}_λ を

$$\mathcal{O}_\lambda := \{\emptyset, Y, (X \setminus X_\lambda) \times \mathbb{N}^X\}$$

で定める. $\lambda, \mu \in \Lambda$ とすると $|X_\lambda \times \mathbb{N}^X| = |X_\mu \times \mathbb{N}^X|$ である.

$\therefore \langle x, f \rangle \in X \times \mathbb{N}^X$ に対し $g = g(x, f) \in \mathbb{N}^X$ を

$$g(y) := \begin{cases} 2f(y) & (y \neq x \text{ のとき}) \\ 2f(y) + 1 & (y = x \text{ のとき}) \end{cases}$$

と定める. $a \in X_\mu$ を取り $\varphi : X_\lambda \times \mathbb{N}^X \rightarrow X_\mu \times \mathbb{N}^X$ を $\varphi(x, f) := (a, g(x, f))$ で定める. すると φ は単射である. よって $|X_\lambda \times \mathbb{N}^X| \leq |X_\mu \times \mathbb{N}^X|$ となる. 同様に \geq も言えるから Bernstein の定理より $=$ が分かる.

そこで, 全単射 $F : X_\lambda \times \mathbb{N}^X \rightarrow X_\mu \times \mathbb{N}^X$ により写像 $G : (Y, \mathcal{O}_\lambda) \rightarrow (Y, \mathcal{O}_\mu)$ を

$$G(x, f) := \begin{cases} F(x, f) & (x \in X_\lambda \text{ のとき}) \\ F^{-1}(x, f) & (x \in X_\mu \text{ のとき}) \\ (x, f) & (\text{それ以外のとき}) \end{cases}$$

$$\begin{array}{ccc} Y = (X_\lambda \times \mathbb{N}^X) \sqcup (X_\mu \times \mathbb{N}^X) \sqcup (X_\nu \times \mathbb{N}^X) \sqcup \dots & & \\ \downarrow G & \begin{array}{c} \swarrow F \\ \searrow F^{-1} \end{array} & \downarrow \text{id} \\ Y = (X_\lambda \times \mathbb{N}^X) \sqcup (X_\mu \times \mathbb{N}^X) \sqcup (X_\nu \times \mathbb{N}^X) \sqcup \dots & & \end{array}$$

と定める. すると G は同相写像である. 故に族 $\{(Y, \mathcal{O}_\lambda)\}_{\lambda \in \Lambda}$ は仮定 3 の条件を満たすので $\prod_{\lambda \in \Lambda} (Y, \mathcal{O}_\lambda)$ はコンパクトである. 閉集合の族 $\{\pi_\lambda^{-1}(X_\lambda \times \mathbb{N}^X)\}_{\lambda \in \Lambda}$ は有限交差性を持つから,

$$\emptyset \neq \bigcap_{\lambda \in \Lambda} \pi_\lambda^{-1}(X_\lambda \times \mathbb{N}^X) = \prod_{\lambda \in \Lambda} X_\lambda \times \mathbb{N}^X$$

となり, 故に $\prod_{\lambda \in \Lambda} X_\lambda \neq \emptyset$ である.

□

※ 「コンパクト Hausdorff 空間の直積はコンパクト」は選択公理と同値でないことが知られている. (BPI (= Boolean Prime Ideal Theorem) と同値である.) また「コンパクトの可算直積はコンパクト」は可算選択公理からでは証明できないことも知られている.

参考文献

- [1] Horst Herrlich, Axiom of Choice, Springer, 2006
- [2] Ofelia T. Alas, the Axiom of Choice and two particular forms of Tychonoff Theorem, Portugaliae Math., 28 (1969), 75–76, <http://purl.pt/2594>
- [3] Paul R. Chernoff, A Simple Proof of Tychonoff's Theorem Via Nets, Amer. Math. Monthly, Vol. 99, No. 10 (1992), 932–934, <http://www.jstor.org/stable/2324485>